弘前大学教職大学院 News & Letter * 11 を 2020.10.13

教職大学院各部会から(各部会長からのコメント) 総務部会長 瀧 本 壽 史



「目は口ほどに……」

10年ほど前から自戒のために「暑さ寒さも60まで(?)」と 内心唱えていたのですが、今年の夏は違いました。夏バテも甚 だしい。これも歳のせいかと思ってはみたもののどうも違う。 原因は「マスク!」でした。多分………。

教職大学院の院生たちは、大学の方針に則り、実習は全てマスク着用で行い、汗だくで授業をしていました。子供たちの多くもマスク着用です。お互いどこを見ているのだろうか。院生も子供たちも必死に「目」で訴えている。「目は口ほどに

……」とはよく言ったものです。「目は心の鏡」(『孟子』)とも。実習を終えて院生室に帰ってくるなりぐったりとしている院生をよく見かけました。脱力した「目」は精一杯頑張ってきたであろう実習の一日を想像させ、心打たれます。この夏の実習で彼らが得た最大の収穫は「目」の持つ力に気づかされたことのように思えます。マスクは「冬」の季語なのですが、既にその季節感は無くなりました。マスクの句には「目」も多く登場します。「コロナ禍や 目は口ほどに 物を言う」〈老教師〉

教務部会長兼FD推進部会長 敦 川 真 樹



自燈明(じとうみょう)

「自燈明」という禅語に初めて出会ったのは、瀧本哲史著「2020年6月30日にまたここで会おう」(星海社)でした。この本は2012年6月30日に著者である瀧本氏が、参加資格を29歳以下に限定したなかで、全国から参集した300人を前に講義を行った内容をまとめたものです。

この「自燈明」とは、息を引き取る前のブッダに、その弟子が「自分たちはこれから何を頼りに生きていったらよいでしょう」と尋ねると、「弟子たちよ、自分自身と向き合い、自分自

身を頼りとして生きていきなさい」と諭したという、ブッダが残した言葉です。

瀧本哲史氏は、「学問や学びというのは、答えを知ることではけっしてなく、先人たちの思考や研究を通して、 『新しい視点』を手に入れることです」と若者たちに語っています。

教職大学院の院生の皆さんには、多様な学びをとおして物事を多方面から見つめ直し、学びにおける『新しい視点』を自ら切り開き、手にしてほしいと思います。

実習部会長 中 谷 保 美

当初4月中旬から開始される予定だった実習の多くが、新型コロナウイルス感染症の影響で、その実施が5月下旬以降にずれ込みました。実習の実施形態も、メディア授業(遠隔授業)方式で行わなければなりません本来の実習をせずに実習の目的を達成しなければならないという難題が課せられましたが、何とかこれをクリ

弘前大学教職大学院 News 🍪 Letter

第11号 2020.10.13



アできました。また、前期フィールド実習(ストレートマスターの院生が実習協力校で授業等をさせていただく実習)は、6月中旬から本来の形で実施でき、ほっとしております。このように実習がスムーズに実施できましたのは、関係教育委員会や実習協力校等の御理解と御協力のおかげです。各院生も、様々な制約がある中で、実習を通してそれぞれの実践力の向上に努めていました。

今後は、後期に予定されている実習が充実したものになるよう、 関係機関の皆様と一層連携・協力してまいりたいと思います。

入試フォローアップ部会長 小 林 央 美



With コロナ時代に求められる創造性

新型コロナウィルス感染症の拡大予防のため、2020年3月2日から、全国の学校が臨時休校となりました。経験したことのない事態に対して、学校はどのように対応したのでしょうか?調査結果や現場の声を概観してみると、健康観察やゾーニングを含む感染予防対策はもとより、オンライン授業の展開、学校再開へ向けた段階的な試み、児童生徒の心のケアや健康教育など、実に多様な教育・予防活動を創造し展開しております。

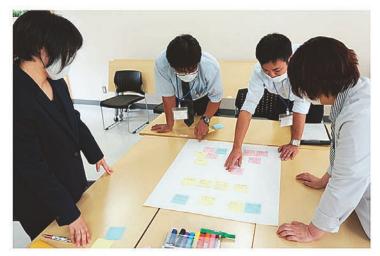
東日本大震災時の取り組みの効果検証から、非常時の対応は、

発災前の日常において、いかに協働的に創造的に学校が教育実践を展開してきていたかが問われるものでした。 日々の創造的な実践は、常に思考し続け協働的に実践を創り上げていくことに他なりません。本教職大学院では「自律的発展力」「協働力」「課題探究力」「省察力」の「いま教員に求められる4つの力」の力量形成を目指しております。創造的な教育実践構築のための学びの一つとして、教職大学院での学びはいかがでしょうか? 教員を目指す学生の皆さん、現職の先生方、入学をお待ちしております。

ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会の活動紹介対話的・実践的に深く学ぶキャリアステージに対応した研修の開発

弘前大学教職大学院は、平成29年度開設当初から令和2年度まで連続して教職員支援機構「教員の資質向

上のためのプログラム開発・実施支援事業」に応募、採択され、一貫してミドルリーダー世代の教員研修について、県教育委員会と協働して開発を進めてきました。その中心となっているのが、教職大学院教員、県教育庁学校教育課及び県総合学校教育センターの指導主事等により構成される、ミドルリーダー養成プログラム開発専門委員会です。同委員会は、教職大学院と教育委員会等関係機関との連携組織「弘前大学教職大学院教育研究協議会」の専門委員会に位置付けられており、年8回程度の頻度で会合を開いて、合同の他県視察



4 つ の カ

弘前大学教職大学院 News Letter

第11号 2020.10.13



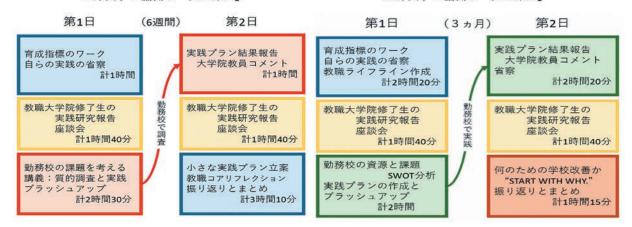
なども踏まえながら、ミドルリーダー世代の研修の在り方を検討し、具体的なプログラム開発 に取り組んできました。

その成果として、令和2年度には、県中堅教 論等資質向上研修の前期及び後期に、教職大学 院主催の代替講座を実施するようになりまし た。プログラムは、前期・後期を通じて青森県 の育成指標に対応した体系的な構成で、教職大 学院の授業や実習での取組を参考に、勤務校 での調査や実践を組み込んだ対話的なワーク ショップ形式となっています。また、教職大学

院修了生による実践研究のプレゼンテーションとキャリアを語る座談会を組み込むことで、青森県教育委員会派遣教員の教職大学院での学びを県内学校現場に広く還元する貴重な機会としています。勤務校の課題を見つめ改善に取り組んだ修了生の実践研究は、組織を意識し始めるミドルリーダー世代の教員にとって学ぶところが大きく、また、教職ライフラインを踏まえたキャリアについての応答は、優れた実践を進める教員も、悩みながら実践に取り組み、人との出会いに支えられていることを知る貴重な機会となっています。

前期「足元をみつめ新たな実践をつくり出す!協働ワークショップ」

後期「学校を活性化する実践を つくり出す!協働ワークショップ」



教職大学院としては、このように作成したプログラムの一部を、中核市である青森市及び八戸市教育委員会の中堅教諭等資質向上共通研修の3時間プログラム等にも生かし、共通の育成指標に基づく県・青森市・八戸市の教員研修をつなぐ役割を積極的に果たしていきたいと考えています。このため、年に1回、県・青森市・八戸市の教育委員会と教職大学院の関係者が一堂に会する「育成指標に対応したミドルリーダー世代の研修を考える協議会」を開催し、成果を共有するようにしています。



今後は、中堅教諭等資質向上研修に続くキャリアステージである充実期の教員研修について、県及び中核市の教育委員会等と意見交換しながら検討していく予定です。

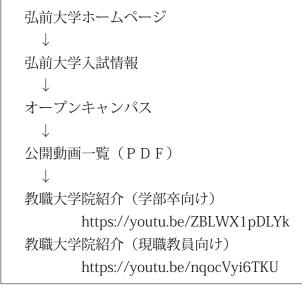
(問合せ先:教職大学院 吉田美穂准教授 m-voshida@hirosaki-u.ac.ip)



第11号 2020.10.13

教職大学院の紹介を YouTube 動画で見ることができます

今年度は新型コロナウィルスの関係から、オープンキャンパスが動画配信で行われました。その関係から教職大学院の紹介も今回初めて動画配信させていただきました。教職大学院に興味や関心のある方は、下記のようにパソコンを操作していただければ紹介動画をご覧いただけます。是非一度ご覧ください。







オンライン授業の院生と教員

令和2年度 2年次院生による中間報告会及び ホームカミングディの開催



昨年度の年次報告会

令和2年2月14日(金)に青森県総合学校教育センターで行った年次報告会で、現在の2年次院生が自身の研究テーマをもとに取組内容を報告しました。それから8カ月が過ぎ、現在その取組を進化させながら教職の在り方を追究し、子供たちの力量を高める教師、より優れたミドルリーダーを目指して頑張っているところです。その中間報告会を令和2年10月31日(土)弘前大学教育学部において下記のとおり開催いたします。既に中間報告会のチラシとして皆様にご案内しておりますが、改めて皆様のご参加を心よりお待ちしております。

期日・時間 令和2年10月31日(土)

8:45~17:35 (受付8:20~)

場 所 弘前大学教育学部(1 F 大教室、2 F 大教室、301教室~304教室)

次 第 (*全日程に限らず、部分的な参加も歓迎いたします)

(1) 全体会開会 (8:45~8:55 2 F 大教室)

(2) 2年次教育実践開発コース院生研究報告(9:20~11:46 1 F、2 F大教室)

(3) 入試説明会 (11:50~12:20 2 F 大教室)

(4) 2年次ミドルリーダー養成コース院生研究報告

(12:50~15:10 1 F、2 F大教室)

(5) ホームカミングディ [修了生と在学院生との討議]

テーマ:「教職大学院での学びと学校現場・教育行政とのつながり」

(15:20~17:30 2 F 大教室、301教室~304教室)

(6) 全体会閉会 (17:32~17:35 2 F 大教室)

第11号 2020.10.13

中間報告会に向けて

M2ミドルリーダー養成コース 葛 西 昌 平 テーマ:校内教員集団に対する指導技術の継承に



関する考察

ー生徒会活動の指導を中 心にしてー

自分自身が取り組んでき た実践を他の教員に引き 継ぐことにはどういう効果

があるか、また、他の教員がその実践を行ったとしても効果が生まれるためには何に留意すべきなのか、ということについて生徒会活動の取り組みを中心にして報告します。生徒会活動は、生徒の立場からの自主的・自治的な活動ではありますが、教員による継続的な支援によってさらに効果的に進めることができるはずです。勤務校に戻った今年は、資料やモノを引き継ぐことも大事ではありますが、同僚の先生方の理解と協力、さらには日々のちょっとした意見交換も引き継ぎには有効だということを実感しています。多くのご意見をいただき、考察を深めることができればと考えています。

M2ミドルリーダー養成コース 木 村 千 穂 テーマ:小学校の外国語活動での学びを生かした



中学校の授業づくり -A中学校区における小中学 生の実態調査を踏まえて-

小中の英語学習の円滑 な移行に向けて、子ども の視点で小中の学びがつ

ながるような授業づくりを目指し、2年目の今年度は勤務校に戻って授業実践を進めています。中学校1年生の担当となり、4・5月の入門期指導では、昨年度の小学校での実態把握を参考に授業を行いました。例年通りにはいかない部分もたくさんありましたが、その中でも同僚の先生方に授業観察に入ってもらったり、子どもの授業の振り返りの記録を参考にしたりしながら、ここまで研究を進めてきました。中間報告会では、それらの実践の経過報告や、昨年度から継続的に実施しているアンケート調査の結果等についてもお伝えできればと思っています。

M 2 ミドルリーダー養成コース エ 藤 清 和 テーマ:特別支援学校(知的障害)における普通



科と専門学科を併設した 高等部の教育課程の在り 方に関する研究

-教科等横断的な視点によるカリキュラム・マネジメントの実践を通して-

本研究では、普通科と専門学科を併設する特別支援学校(知的障害)高等部におけるカリキュラム・マネジメント(以下カリマネ)の現状と課題を把握するとともに、教科等横断的な視点による各教科等の単元及び授業の改善を図るための効果的な手立てを検討することを目的としています。

今年度は、勤務校における実践研究を進め、①新学習指導要領に関する研修会等の計画と実施、②校内研究における教科等横断的な視点による単元配列表の作成と活用、③「知的障害教育におけるカリキュラム・マネジメント促進フレームワーク」(特総研2017)を参考とした具体的方策の検討、及び実践と検証に取り組んでいます。また、他校からいただいた資料や質問紙調査の集計と分析を進め、カリマネの現状と課題、対応方策を明らかにしていきたいと考えています。

M2ミドルリーダー養成コース 野 呂 和 也 テーマ:数学科組織としての授業改善を目指した



研修体制の一考察 一生徒に考えさせる授業 づくりを通して一

今年度は大学院でのこれまでの学びを活かし、 改善の視点を持ちながら

1学年担任としての学級経営や生徒対応、数学の教科担任としての授業実践に取り組んでいるところです。8月の研究授業では「生徒の学びの変容の見取り」を中心として参観していただき、それを根拠とした「教師同士の対話」を通してふり返る、ワークショップ型の研究協議会を実施しました。本校の数学科の先生方全員に参加していただきましたが、これまで実施してきた協議会以上に積極的かつ熱心に話し合いをしていただくことができたように感じています。協議会での意見・助言や事後アンケート等をもとに、成果や今後の課題について整理し報告したいと思います。

M2ミドルリーダー養成コース 花 田 美 衣 テーマ:中学校における通常の学級と通級指導教



室の連携の在り方

通級による指導をより 効果的なものとするため には、通常の学級と通級 指導教室との連携が重要 であると考えています。

そのために、通常の学級の先生方と日常的なつながりを築きながら、通級による指導の内容を分かりやすく伝えること、「見える化」を図ることに重点を置いて研究を進めています。

本校の通級指導教室は開設から5年目を迎えてい



弘前大学教職大学院 News 🏵 Letter

第11号 2020.10.13

ます。これまでの運営から継続して取り組むこと、新たに始めたこと、それぞれに課題はあります。しかし、学級担任や教科担任はもちろんのこと、教務主任や学年主任の先生方も協力してくださり、通級指導教室を運営することができています。中間報告会では、本校の先生方のご協力のもと、これまでに実践してきた成果と課題を整理し、今後の研究の方向性について発表したいと思います。

M2ミドルリーダー養成コース 原 田 正 樹 テーマ:小規模校における教員相互の指導力向上



を目指した取組 一低中高ブロック体制で の教員連携を通して一

私の研究テーマは、「小 規模校における教員相互 の指導力向上を目指した

取組~低中高ブロック体制での教員連携を通して~」です。約20年の教職経験の中で、小規模校(複式学級のある過小規模校を含む)での勤務経験が多く、学級担任=学年主任を若手のうちから担うことが多かったように思います。少子化傾向により小規模校の割合が増加している現状から、「小規模校であっても大規模校の学年団のように先生方で助け合えるシステムを構築できないか」と考えたことがテーマを志したスタートになっています。勤務校の先生方の力強いバックアップもあり、ブロック内の連携強化による指導力(教員力)の向上が知徳体の様々な場面で感じられる取組となっています。更なる連携強化を図るべく今後も研鑽を積んでいきたいと思います。

M2ミドルリーダー養成コース 平 田 貴 和 テーマ:異文化理解に重点を置いた新しい形の外



国語指導 - ALT との協働を基に して-

高等学校で行われている ALT との TT はゲーム 等のアクティビティが中

心である場合が多く、「普段の授業とは違うもの」として扱われてきました。この研究では、ALTとの協働による外国語指導の在り方について見直し、異文化理解に重点をおいた新たな取組を実践することで、ALTと生徒の異文化理解を促し、コミュニケーションツールとしての英語を学ぶ楽しさと重要性を生徒に伝えることを目的としています。今後 ALTをさらに活用し、より効果的な TT を実践するために JET が何をすべきかを探っていきたいと考えています。

M2ミドルリーダー養成コース 坂 本 小百合 テーマ:学級担任だからできる外国語活動・外国



語科の授業づくり 一小中連携を生かした英 語教育の充実に向けて一

今年度は勤務校に戻り、小学校の学級担任が 日常的に子どもたちと英

語でやり取りできる授業を実現するために、主に二つのことに取り組みました。一つは、英語の授業について中学校教員と共に協議する小中合同研修会をはじめとする校内研修、もう一つはクラスルーム・イングリッシュの教室掲示などを行い、学級担任が英語で積極的に子どもとやり取りしやすい環境づくりです。

中間報告会では、勤務校の先生方のご理解とご協力を得て実践することができたこれまでの校内研修を中心に報告します。この実践研究を進めることができていることに感謝し、これからも外国語の授業づくりに励んでいきたいと思います。

M2教育実践開発コース ー 戸 萌 里 テーマ:中学校国語科における「言葉による見



方・考え方」を働かせる 単元学習の研究

ーパフォーマンス課題の 設定とルーブリック評価 の活用を通して-

私は、昨年度から国語

科における「見方・考え方」を働かせる単元学習について研究しています。昨年度の授業実践で、生徒が「言葉への自覚を高めている姿」を見取ることができました。今年度は、新たにパフォーマンス課題とルーブリック評価を取り入れ、生徒がより「できるようになった」を自覚できるような授業の展開を目指しました。

中間報告会では、生徒が取り組んだパフォーマンス課題をルーブリックで評価し、作品への理解や考えの変容をまとめ、研究全体の成果と課題を報告いたします。同時に、これまでの実践の省察を行い、生徒が深い学びを得られる授業づくりにつなげる機会としたいと思います。

M2教育実践開発コース 金田宏樹 テーマ:高等学校における地理的な見方・考え方



を働かせる地理教育 - G I S教材の活用を通 して-

昨年度に引き続き、G IS教材の活用を通した 「地理的な見方・考え方」



弘前大学教職大学院 News 🍪 Letter

第11号 2020.10.13

を働かせる地理教育について、研究に取り組みました。今年度は、これまで実践してきた「資料提示型」の授業に加え、生徒自身がGISを操作する「生徒能動型」の授業を実践しました。「地理的な見方・考え方」には、「位置や分布」「場所」「人間と自然環境との相互依存関係」「空間的相互依存作用」「地域」の5つの視点が示されています。これらの視点を授業のねらいに置いた上でGISを活用し、生徒が自在に「地理的な見方・考え方」を働かせられるよう意識しました。必修化される「地理総合」に向けて、実践をさらに積み重ねていきたいと思っています。

M2教育実践開発コース 古 川 弘 基 テーマ:伝え合う力を高める国語科学習指導



一話す・聞く言語活動の 充実を通して一

本研究では、国語科の 単元学習において児童の 伝え合う力を高めること を目指しています。昨年

度の実践研究テーマ「伝え合う力を高める教科横断的な学習指導」から焦点化を行い、国語科で実践を行います。「五つの言語意識」(小森1999)を参考に、「伝え方を意識できる言語活動を取り入れ、省察するようにすることで自分の話す・聞く態度に対して自覚的になるだろう」という研究仮説を立て実践しています。自分の伝え合う力について、他者評価を取り入れた上で取組を自己評価することで、自分のよさを知り自信を持ち、課題意識をもって次の活動にのぞむ姿が見られると考えています。

M 2 教育実践開発コース 佐 藤 皓 ー テーマ:高等学校「現代社会」における公民的資 質の向上



ー地域課題の分析と発表 を通して一

現在、集中実習でもこのテーマを意識して取り 組んでいます。今年は授

業だけでなく昨年から取り組んでいるニュース発表にも改善を加え、生徒の公民的資質の向上を見取っている最中です。公民的資質とは、簡潔に言うと①意欲や態度、②自主的な精神、③人間としての在り方・生き方についての自覚、④実践的意欲の4つです。公民的資質は、社会に出てから必要な能力ばかりです。これらを高校の現代社会の授業を通じて向上させることを目標にし、日々考察し探究しています。

M2教育実践開発コース 須 藤 大 貴 テーマ:児童が主体的に取り組む小学校音楽科の



授業づくり

ー表現及び鑑賞の領域 を関連させた授業を通 して一

児童が自ら目的意識を 持って音楽活動に取り組

んでいくという主体性を育てていくためには、学習形態の工夫や教材の工夫、表現と鑑賞の領域を関連させた指導の工夫が特に重要であると考えられます。今回の授業実践では、鑑賞と器楽の活動に繋がりを持たせるとともに、活動の中で「児童が主体的に授業に取り組むための手立て」を多く取り入れ、児童に活動への意欲を持たせ、主体的な姿を促すよう工夫しました。児童の授業での様子、ワークシートの記述やアンケートの集計結果から、多くの児童から活動に主体的に取り組んでいる姿を読み取ることができた一方、児童によって演奏の技能に差があるなどの課題も明らかになっています。

M2教育実践開発コース 蛸 嶋 亮 介 テーマ:生徒の語彙能力を高める英語授業の在



り方 一音声指導に注目した学 習活動を通して一

二つの学習活動英単語 を勉強する際に、皆様は どのようにしてそれらを

記憶していたでしょうか。ひたすら紙に書く、ローマ字読みを試みる、似ている語を関連付けて覚える、「語彙学習ストラテジー」と呼ばれるこれらの学習方略は非常に多岐にわたります。

本研究の目的は個人活動・小集団活動としての学習活動と、生徒が持つそれぞれの語彙学習ストラテジーを比較検討する事で、一人ひとりの生徒に適した英語学習の形を考察するというものです。その実現のために、今年度行った実践を基に現在までの進捗状況をご報告させていただきます。

M2教育実践開発コース 谷 垣 花 テーマ:保健室前廊下の掲示物を活用した保健指



導のあり方について

ー生徒のヘルスリテラシー向上を目指した養護 実践-

養護教諭が作成する掲 示物は、保健指導の際に

活用される媒体の一つであり、各学校の健康実態等



弘前大学教職大学院 News 🍪 Letter

第11号 2020.10.13

を踏まえた養護教諭の工夫が凝らされています。本 研究では、生徒の健康に関する諸課題を踏まえ、保 健室前に掲示する掲示物を通して、健康行動に対す る自律的姿勢を育むことを目的としています。最終 的に、提示されている多様な健康情報の中から生徒 自ら実態に即した情報を選択し、健康行動を実践す る力を身に付けることを目指します。

今年度は、前年度実施したアンケート調査の分析 と仮説の検証から得られた結果と考察をもとに掲示 物の作成を行いました。効果的な掲示物の要素とし て、イラストが多いなどの「視覚性」やゲームのよ うに参加できるなどの「参加可能性」が考察されま した。報告会では今までの実践と成果を報告します。

M2教育実践開発コース 成 田 伊 織 テーマ:生徒一人ひとりが主体的に取り組むため



の授業のあり方 一協働学習を通して一

高等学校学習指導要領において化学の目標の一つとして、化学的な事物・現象に主体的に関わり、

科学的に探究しようとする態度を養う力の育成が挙げられ、「主体的な学び」を促すような指導の重要性が示されています。しかし高校の教師へのアンケートの中で、生徒の学習に対する主体性の課題を挙げた割合は「感じる」「やや感じる」を合わせて85%と高く、主体的な学びを実現するための指導の変化が必要であることが指摘されています。この点を踏まえ、本研究では生徒一人ひとりが主体的に取り組む授業のあり方について発表したいと思います。

M2教育実践開発コース 藤 澤 麻衣子 テーマ:保健室における救急処置時の個別の保健



指導のあり方 一生徒の主体性を引き出 す問診票と対話の工夫一

本研究では、生徒の主体性(身体が呈している 状況を自分自身のものと

捉え、身体の主体者として対応していこうとする意識)を引き出すための個別の保健指導の手立てを検討します。今回は、自身の主体性を引き出す問診票の活用や対話の工夫(仮説)と自身の実践について報告します。研究テーマの原点は、「生徒の課題解決力をどのようにつけていくか」という実習でのつまずきでした。指導教員や同じゼミの院生と自身の対応についてじっくりと振り返る中で、生徒の反応から見えてくるものが多くありました。実習校の生徒や先生方から頂いた学びを形にできるよう、今後

も頑張りたいと思います。

M2教育実践開発コース 山 田 啓 明 テーマ:「考えの形成」を豊かにする国語科学習 指導



一内言を外言化する言語 活動を通して一

生徒の「なんとなく」 という言葉の内にある考 えを、何とかして形にで

きないものか、というところが出発点です。集中 実習では「モアイは語る―地球の未来」という教 材を通して、「地球の未来」について自分の考えを 述べる活動を行いました。教科書を読んで「なる ほどな」ではなく、自分ごととして内容を捉え、 考えを述べている生徒が多く見られました。一方 で、教科書のまとめに終始しているものも見られ ました。授業の中で、どんな手立てが有効であっ たのか、など客観的に分析しながら、報告にまと めたいと思います。

M2教育実践開発コース 米 田 雄 人 テーマ:児童がお互いの考えを共有し、多様性を



認め合う道徳科の授業づ くり

道徳教育及び道徳科では、道徳性を養うことを 目標としています。その 実現のためには、児童が

多様な価値観に接することが大切であり、対話や協働を通して、物事を多面的・多角的に考えることが求められています。しかし、その対話や協働には不安定さが内包されており、前提として、児童同士が認め合える関係、すなわち「対話的関係」の必要性が指摘されています。本研究では、その「対話的関係」の構築に向けて、昨年度は小学校第4学年児童、今年度は第6学年児童を対象に道徳科を中心とした授業実践を行い追究してきました。今回は、その「対話的関係」の構築に向けて実践してきた、授業内外での取り組みについて報告します。

〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻 (教職大学院) News Letter 第11号 2020.10.13発行 〒036-8560 青森県弘前市文京町 1 番地 Tel 0172-36-2111 (代表)

メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp HP 弘前大学教育学部(教職大学院をクリック) 弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会